

日本におけるリエゾン・ライブラリアン

—千葉大学附属図書館の挑戦—

金 山 亮 子 (千葉大学情報部情報サービス課)

武 内 八重子 (千葉大学情報部情報サービス課)

1. はじめに

2005年11月、千葉大学附属図書館では、University of Massachusetts Amherst のリエゾン・ライブラリアン (アジア言語、文学) のシャロン・ドマイヤー氏を迎えてオープンフォーラムを行った。サブジェクト・ライブラリアンとリエゾン・ライブラリアンの話を中心に、アメリカの大学図書館についてドマイヤー氏に話していただいた。アメリカの大学図書館について、質疑応答を交えながら現場の方のお話を聞くことのできる貴重な機会となった。ⁱ

「サブジェクト・ライブラリアン」はよく聞かすが、「リエゾン・ライブラリアン」とは一体どんな仕事をしているのだろうか。

ドマイヤー氏によるとリエゾン・ライブラリアンとは、「先生方の依頼を聞く、質問に答えてレファレンスする、収集する、先生方が買ってほしいものを受け取る、そういうのがリエゾン・ライブラリアンの仕事です。サブジェクト・ライブラリアンほど知識がなくていいんですよ、ただ相手をするのがリエゾン・ライブラリアンの仕事」とのことである。「相手をするのが仕事」とはどういうことだろうか。

辞書の定義を参照すると、Liaison と Subject Specialist の違いは、前者が「仲介役」という教員と図書館との橋渡しの役割、後者は専門知識があることが重要視されていることが分かる。"Liaison" (連携) と "Subject" (主題) の本来の意味が業務の中身を表しているようである。ⁱⁱ

2. アメリカにおけるリエゾン・ライブラリアンの実際

2006年3月、筆者らはアメリカのリエゾン・ライブラリアン制度について調査するため、

University of Maryland (UMD)、George Mason University (GMU)、Ohio State University (OSU)、University of Washington (UW) の大学図書館を訪問した。いずれも州立の総合大学である。

アメリカの大学図書館の職員制度は日本と大きく異なる。(1)図書館員の採用は「職務内容が定義されたポジション」に対して行い、他の係に異動したり、経験により昇進したりすることは(基本的には)ない。(2)大学によるが、図書館員が faculty status (教員もしくは同等の身分)を持つことが多い。ⁱⁱⁱ faculty status を持つ場合、論文を書く、学会で発表するなどといった研究職としての成果も評価の対象となる。(3)リエゾン・ライブラリアン、サブジェクト・ライブラリアンという名称は、各大学で職名としてつけられており、同様の仕事をしているようで名称が異なる(あるいは逆の)こともある。この論文では、教員や学生との連携を主たる業務としている図書館員を「リエゾン・ライブラリアン」と表し、各大学の職名については英語で表記して区別することにする。

各大学のリエゾン・ライブラリアンの名称と faculty status の有無は、表にまとめた。UMD では、図書館学の修士号を持つスタッフは faculty status である。GMU では faculty の中でも academic、

表：訪問した各大学での名称と faculty status の有無

	Liaison	Subject	Faculty status
Univ. Maryland		○	○
George Mason Univ.	○		○
Ohio State Univ.		○	○
Univ. Washington		○	—

professionalなどと分かれており、図書館員はprofessional facultyである。UWではacademic staffと位置づけられている。

訪問した中で唯一liaison librarianという名称を採用しているGMUでは、the Liaison Advisory Teamとコーディネーターをおいて、リエゾン制度を整えている。liaison librarianはサービス部門に所属し、参考調査・選書・ガイダンスと、それらをもとにしたOutreach/Marketingを担当する。選書に際しては、それぞれが分野の資料についての予算を持ち、いずれの分野にも属さないような参考図書類はコーディネーターが選定を担当している。また、各liaison librarianは主題に関連したガイダンスだけを担当するため、全体を通して必要な内容を学生が習得できるようにinstruction coordinatorが調整を行っている。

担当する主題の選択は、基本的には学生時代の専門を活かしていることが多いようだが、UMDで話を聞いた3人のsubject librarian（それぞれBusiness、Life science/Engineering、Humanity）は、担当する主題と学生時代の専門が異なっていた。各々学生時代は選択しなかったが興味のある主題を選んで、図書館員となったそうである。彼女らは仕事をしながら積み上げてきた知識を基に、資料の選定、参考調査やガイダンスといったサービスを行っている。

また、自己研鑽という点では、UWのsubject librarian有志によるミーティングが挙げられる。3ヵ月に1度開催しており、私たちが訪問した回のテーマは、学生が興味を持ちやすいガイダンスの方法についてであった。クロスワードや、自分で館内ツアーをしながらクイズの答えを探すといった遊びの要素を取り入れたガイダンスや、それぞれの調査を基にしてロールプレイングを行うコミュニケーションの授業など、お互いの経験や知識を披露し、意見を出し合っていた。普段は各学部図書室などに分かれて仕事をしているため、こうした情報交換の機会を自主的に設けてブレインストームをしているとのことだった。

OSUやUMDなど機関リポジトリを設置してい

る大学では、リエゾン（サブジェクト）・ライブラリアンがリポジトリの広報活動に関わっていた。OSUではsubject librarianがリポジトリ専任ライブラリアンと一緒に教員に説明に行っていた。またUMDでも同様の広報を計画していた。リポジトリ担当が教員に説明をする際に、顔見知りであるリエゾン（サブジェクト）・ライブラリアンが同行することで、教員へのメリットなどをより具体的に話すことができ、協力も得やすくなるようである。

利用者に対しては、ほとんどのリエゾン・ライブラリアンが図書館サイト内に自分のサイトを持ち、名前と連絡先、顔写真などを掲載して「私が担当します」というアピールをしていた。学部ページにも名前と連絡先を載せてもらったり、教授会に出席するなど、できるだけ教員や学生の目に付くよう工夫をしているとのことだった。重要なのは、「〇〇担当ライブラリアン」という肩書きだけではなく、個人名を出すことである。また、UWのsubject librarianのいくらかは新入大学院生のオリエンテーションで「Free Latte with (subject librarianの名前)」というクーポンを渡し、館内のカフェでお茶を飲みながら個別に研究内容について話す機会を作っている。^{iv}

図書館員が情報検索の授業ではなく、主題をメインに扱った授業を行っているのは、主題知識を持ってサービスをするサブジェクト・ライブラリアンらしい仕事であると感じた。日本のマンガに関する新入生向けの授業を持っているOSUのsubject librarian（主題はJapanese "Manga"）は「マンガへの興味をきっかけに図書館員に親しみを持ってもらえれば良い」と話し、学生が気軽に話しに来るような良好な関係を築いていた。この授業を履修した後に大学院生になって、希望するfacultyに個別で授業をしてもらうコースを彼女に依頼してきた学生もいた。

最後に、大学図書館ではないが、議会図書館（LC）でもサブジェクト・ライブラリアンが活躍しており、LCではResearch Specialistと呼んでいる。^v Research Specialistは約1,000人おり（ス

スタッフ全体の1/5)、主題の博士号あるいは図書館情報学と主題の両方の修士号を持つことが採用の要件とされている。議会や利用者からの主題に関する質問に答えることをはじめ、簡易および詳細な主題検索ガイドの作成、資料収集などを担当する。

3. リエゾン・ライブラリアンの利点

リエゾン・ライブラリアンの役割は、個別の利用者(学生・研究者・教員)に対して、その人に特化して一貫したサービスを企画・実施することである。

小さな図書館では少ないスタッフですべての業務を行うため必然的に一貫したサービスを行うことになるが、目録・サービスなど業務を分担している図書館では、教員や学生は用務により別の図書館員と接することになり、時には同じ説明を複数の図書館員に繰り返すことになってしまう。

リエゾン・ライブラリアンの制度が導入されると、教員は図書館に関する全ての問い合わせ窓口が一人の図書館員になる。学生は専門分野に関する質問に答えてくれる図書館員が決まっているので尋ねやすくなり、資料を自分の力だけで探していた時よりも様々な方法で見つけることができる。また図書館員側からすると、選書からレファレンスまで担当分野の教員や学生と密接に関わることができるので、個々の利用者が必要とするサービスや資料を的確に把握し、最適な方法で提供することができるようになる。

4. 千葉大学附属図書館での取り組み

千葉大学は、文、教育、法経、理、医、薬、看護、工、園芸の9学部、全学部の上に博士後期課程までの大学院、専門法務研究科、医学部附属病院、各センター等を擁し、教員約1,200名、事務職員約600名、学生数約15,000名(学部学生11,000名、大学院生3,600名、その他研究生等500名)から構成されている(2006年度)。キャンパスは西千葉地区、亥鼻地区、松戸・柏の葉地区にあり、各キャンパスに附属図書館(本館、亥鼻分館、松

戸分館)がある。所蔵図書は約140万冊、利用可能な雑誌タイトルは約25,000タイトルである。職員は3館合わせて、常勤職員23名、非常勤職員29名で構成されており、常勤職員から庶務・会計系を除いた図書系職員については、基本的には大学の他部局への異動はなく、附属図書館の外へ異動する場合でも他機関の図書館である場合がほとんどである。

本学では、図書館員と教員・学生との接点は「図書発注」「雑誌契約」「レファレンス業務」「情報リテラシー教育」「ILL依頼・受け渡し」など様々あるが、来館しない教員・学生とは接点を持ちにくかった。しかし、大学図書館が大学の教育研究のためにあるならば、来館する利用者だけを相手にしては本来のサービスとはいえず、来館しない人もサポートすることが役割であろう。大学図書館員は図書館で待っているのではなく、教員や学生と積極的にコンタクトをとって、ニーズを把握し、提供しなければならない。そこで千葉大学では「連携」を重視したリエゾン・ライブラリアンという制度を導入することを計画した。

国内の先例としては、法政大学多摩図書館で「ゼミ担当制度」として、図書館員がゼミ(専門演習)の活動とゼミ生個人々人をサポートしている。学生は、2年生からゼミに所属し、ゼミ論・卒論に向けて各自が決めたテーマで研究を行う。図書館員は9人で多摩キャンパスにある経済学部、社会学部、現代福祉学部の全てのゼミを分担し、ゼミのテーマに適した選書やガイダンスを行っている。またゼミ生自身が研究テーマを書いたエントリーシートを任意で図書館に提出することができ、図書館員は、ゼミ生に合わせた選書、ガイダンスも行っている。ゼミ担当制度は、主題情報の専門家を目指すのではなく、情報収集により学内で行われる研究の傾向を掴み、必要な資料や情報を提供することを目的としている。

千葉大学では、アメリカにおける制度・実践を参考にしつつも、学生・教員に対して図書館の側から積極的にアプローチしていくという精神を重視し、大学全体としての教育活動への体系的、積

極的支援を行うという観点から、教養教育をターゲットとした活動を出発点とすることにした。具体的には1年生の前期に必修の「教養コア科目^{vi}」を対象としたパスファインダー^{vii}作成を2007年度の授業から試行的に始める。専門教育をターゲットとした法政大学に比べ、大学教育の入口を重視した取り組みといえる。

このためのワーキング・グループ、「リエゾン・ライブラリアン・プロジェクト」を2006年秋に立ち上げた。メンバーは図書館員11名で構成されている。

パスファインダーの作成はメンバーから管理職を除いた9名が担当し、教員36名(60科目)を割り振った。パスファインダーは、シラバスの情報に基づいて、教員とやり取りをしながら1科目につき1つ作成する。学生へはウェブによってhtmlと印刷用(PDF)を提供し、教員が印刷してクラスで配布することも可能である。前期終了後の7月末にはパスファインダーを千葉大学学術成果リポジトリ(CURATOR^{viii})に教材として登録し、類似したテーマを探す際のレファレンス・ツールとして活用する予定である。

千葉大学においてはパスファインダー作成をあくまで、リエゾン・ライブラリアンの活動の一部の機能としてとらえており、それ自体を完結した目標としてはいない。今後は、パスファインダー作成をスタートとして、教員とのパイプを太くしていき、資料の整備に反映していく予定である。実際、教員とやり取りすることにより、これまで把握の難しかった授業中に提示される参考資料の情報を得ることができている。各図書館員が、担当教員と連絡を密に取ることで、授業や研究の内容を知ることができ、そこで得た情報を蔵書構築やサービスに生かすことができるようになるだろう。また、機関リポジトリの広報活動などにも関係を活かしていきたい。

最後に日本におけるリエゾン・ライブラリアンの姿を考えてみる。法政大学や千葉大学の例を踏まえると、日本のリエゾンは教育との連携からスタートするのが望ましいように思われる。それぞ

れが特定の分野を担当し、教員や学生をサポートすることになる。そのために、担当分野に関連する情報や図書館の所蔵資料を把握することは必須である。しかし、把握するだけでは不十分で、教員や学生が求めているもの、例えば授業で扱われているテーマなどと関連づけられなければ、的確なサービスは提供できない。

利用者と図書館員とのリエゾン、すなわち連携に基づいたサービスを提供していくことが、これからの図書館の果たすべき役割となるだろう。

紙幅の都合で個人名を記載いたしませんが、アメリカの図書館で興味深いお話を聞かせてくださった皆様、また、急な依頼にもかかわらず、調査に応じてくださった法政大学多摩図書館の皆様

(かなやま よりこ、たけうち やえこ)

ⁱ 日米図書館オープンフォーラムの詳細については、下記URLを参照

<http://www.LL.chiba-u.ac.jp/~joho/Workshop/openforum2005/>

ⁱⁱ Dictionary for Library and Information Science (2004)によると、

Liaison: In academic libraries, librarians are often assigned one or more academic departments for which they serve as intermediary between the teaching faculty and the library. Liaison responsibilities may include bibliographic instruction, collection development (including reference and electronic resources), current awareness, and faculty training in the use of library resources. Most liaison librarians have academic preparation or at least some level of expertise in the disciplines they serve.

Subject specialist: A librarian qualified by virtue of specialized knowledge and experience to select materials and provide bibliographic

instruction and reference services to users in a specific subject area or academic discipline (or subdiscipline) . In academic libraries, subject specialists often hold a second master's degree in their field of specialization. Also refers to a librarian trained in subject analysis.

ⁱⁱⁱ 高木, 和子. 米国大学図書館員のファカルティ・ステイタス. 情報管理. 2003, Vol.46, No.8, p.554-560.

^{iv} Albano, Jessica. The Must List. College & Research Library News. 2005, Vol.66, No.3, p.203-205, 228

この論文には書かれていないが、同じUWの subject librarian (history) は、週に2時間は担当する学部でオフィスアワーを持つことで、学生や教員が図書館まで行かなくても、気軽に立ち寄って相談できるようにしていた。

^v 日本の国立国会図書館の調査及び立法考査局に相当する。

^{vi} 教養コア科目とは複数分野の導入的な知識と学問観を習得することを目的のひとつとしているもので、各自の専門分野以外のテーマを選択することになっている。教養コア科目には全学部の教員が関わっている。

^{vii} 『図書館ハンドブック (第6版)』によるとパスファインダーとは、「ある主題について、関連する文献・情報の探索法をまとめたもの。一般にリーフレット形式でまとめられる」とある。現在では、電子的コンテンツが学術情報流通の主流となっていることを考慮して、頒布形態においてもウェブ技術が活用されている。

^{viii} 千葉大学学術成果リポジトリ (CURATOR <<http://mitizane.LL.chiba-u.jp/curator/>>) は、千葉大学内で生産された電子的な知的生産物 (学術論文、学位論文、プレプリントなどの学術情報) を蓄積・保存し、学内外に公開するためにインターネット上の発信拠点として2005年に構築された日本最初の機関リポジトリである。

<参考文献>

1. The ALA Glossary of Library and Information Science. 2nd ed., Chicago, American Library Association, 1983.
2. Encyclopedia of Library and Information Science. 2nd ed., New York, Marcel Dekker, 2003.
3. Frank, D. G., et al. "Information Consulting: The Key to Success in Academic Libraries." Journal of Academic Librarianship, Vol.27, No.2, 2001, p.90-96.
4. "Guidelines for Liaison Work in Managing Collections and Services." American Library Association. 2006.
(online) , available from <<http://www.ala.org/ala/rusa/rusaprotocols/referenceguide/guidelinesliaison.htm>>, (accessed 2007-02-09)
5. International Encyclopedia of Information and Library Science. 2nd ed. London, New York, Routledge, 2003.
6. Jenkins, Paul O. Faculty-Librarian Relationships, Oxford, Chandos Publishing, 2005
7. Latta, G. F. "Liaison Services in ARL Libraries. SPEC Kit 189." (1992) ,
(online) available from <http://www.eric.ed.gov/sitemap/html_0900000b801478cf.html>, (accessed 2007-02-09)
8. RASD Guidelines for Liaison Work. RQ. Vol.32, No.2, 1992, p.198-204.
9. Reitz, Joan M. Dictionary for Library and Information Science. London, Libraries Unlimited, 2004.
10. 最新図書館用語大辞典. 東京, 柏書房, 2004.
11. 日本図書館情報学会. 図書館情報学用語辞典. 第2版. 東京, 丸善, 2002.
12. 竺, 覚暁. サブジェクトライブラリアン (Subject Librarian: SL) システムとは何か. 専門図書館. 178号, 1999, p.25-29.

13. 菊池, しづ子. 大学図書館における主題専門
図書館員. Library and information science.

第15号, 1977, p.85-95.

Toward a Japanese Concept of Liaison Librarianship: A Challenge of the Chiba University Library

(By Yoriko Kanayama and Yaeko Takeuchi, Chiba University, Department of Data and Information Systems, Information Service Division)

The present article discusses the implementation and practice of liaison librarianship based on the authors' research on North American libraries after analyzing various definitions of its concept, presents a reinterpretation of the concept in the Japanese context and the precursory implementation in Hosei University Library, describes a new approach at the Chiba University Library which focuses on collaboration with the teaching faculty at liberal arts classes and argues for the advantage of the approach.

[著者追記]

P19 の注 v 「日本の国立国会図書館の調査及び立法考査局に相当する」という記述に不正確な部分があったため、国立国会図書館様からご指摘がありました。

ご指摘によると、「国立国会図書館では国会からの調査要請には調査及び立法調査局が、一般の利用者へのレファレンスには主題情報部が対応しています」とのことです。

このコメントについては、『専門図書館』223 号, p52 に掲載されておりますので、そちらもご覧下さい。

調査が足りず、ご迷惑をおかけし、大変申し訳ございませんでした。